新横綱でさらに土俵の充実を

大相撲に新しい横綱が生まれた。初場所で初めての賜杯を手にした稀勢の里だ。日本出身としては19年ぶりである。新入幕から横綱に登り詰めるまでにかかった場所数は、昭和以降で最長の73。優勝の次点となったのも12回に及ぶ。長年にわたる精進と辛抱の賜物が、今回の昇進である。拍手を送りたい。

今後は、白鵬ら他の３横綱と競い合い、伝統を次代に継ぐ努力を重ねてほしい。後輩力士の範となるよう、角界の最高位にふさわしい技量と品格の向上に邁進することも忘れてはならない。

振り返れば、大相撲の人気は1990年代のいわゆる「若貴ブーム」以降、長く低迷した。

2000年代に入って不祥事が相次ぎ、相撲界への信頼が大きく揺らいだのが一因である。

親方らが逮捕・起訴された新弟子の暴行死事件には耳を疑った。力士の野球賭博への関与が明るみに出たほか、八百長問題では処分者が相次ぎ、11年の春場所は開催中止に追い込まれている。

その間、土俵では、朝青龍や白鵬らモンゴル勢に有望若手が次々に挑む構図が長く続いた。分厚かった上位陣の壁に、最近じわじわ風穴が開きだし、同時に日本相撲協会の組織改革やさまざまな営業努力もあって、女性や外国人におファン層は広がった。琴奨菊や豪栄道ら優勝の顔触れも次々変わった昨年は、6場所計90日の本場所中、88日も満員御礼を記録した。初場所も連日の大入りだった。

新たな横綱の誕生で、この流れに弾みが付くことを期待したい。若い人たちの関心が高まれば、入門者が増えるなど裾野の拡大にもつながるのではないか。

さらなる人気の回復と定着のため何より重んじなければならないのは、土俵の上での取り組みの充実だ。心技体を鍛え抜いた力士同士の熱戦こそ醍醐味である。稽古の虫となって叩き上げてきた新横綱は、自ら範を示し角界を引っ張っていってほしい。